



『古今集冷泉持為抄』の一性格：
『百人一首満基抄』の引用に関連して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005187

『古今集冷泉持為抄』の一性格

——『百人一首満基抄』の引用に関連して——

田 中 まゆみ

む

『古今集冷泉持為抄』（以下略して『持為抄』）と記す。は、

奥書に、

此集談議事去宝徳二天秋依花頂殿様之御馳望冷泉持為舌所也

仍而序北野法淨院之明献同聴云云同明献文明九年春

とあって、冷泉持為の講説を聞き書きしたものであることを記している（注一）。とすれば、下冷泉家の祖となった持為が、冷泉家に伝えられた説によつて講釈したものと考えられそうだが、内容的には不審な点がいくつもある。

たとえば井上宗雄氏は、仮名序の「今はふじの山も煙たたずなり」の「たたず」を『持為抄』が、

不立とかきたる流もあれとも当流には不断と留てた、すとよ

と「不断」説を採っていることを指摘して、内容的に持為の説とするにはやや疑いもある。一と言つておられる（注二）。仮名序のこの箇所の解釈は、二条家説では「不断」とし、冷泉家説では「不立」とすることが、両家の説の相違点としてよく取り上げられるが、それによると、『持為抄』は、二条家説を採っていることになるのである。

このように疑いをもたれている『持為抄』であるが、本稿ではまずこの疑いの上に立って、さらに疑問を追加してみようと思う。

（一）

『持為抄』は、右に挙げた序注の例のように、「当流」説を引用する以外に、俊頼、家隆、定家、頼昭などの説として、いくつ

かの説を引いている。たとえば、

さく花は千くさながらにあだなれどたれかははるをうらみは
てたる (巻一 春下 一〇一番 藤原興風)

の歌について、『持為抄』は、

此歌は多説あり。頭昭流には花は千種なからあだなれとも、
みな人太かたにおしむ也。我ひとり春のくる、まて恨はて、
ありと花に云かけたる也。

という、頭昭流の説を挙げている。ところが、『頭昭古今集註』
「注三」を見ると、まず歌の本文の第一句目が「サクラハナ」と
なっている。そして注釈も、

チクサトハサマノモノゾ、ツネニハヨメド、サクラヒ
ヒツニトリテモ、カレコレヲチクサトヨミタルナリ

と、いろいろな桜の花を千草と言っているのだと述べていて、

「桜花千草」として解釈しているのである。したがって『持為抄』
の引用する頭昭流の説は、『頭昭古今集註』の頭昭の説と異なっ
ているのである。

また、

秋はぎにうらびれをればあしひきの山したとよみしかのなく

らむ (巻四 秋上 二二六番 よみ人しらす)

の歌について、『持為抄』は、

うらひれをればは、うちふれをれば也。

と、「うらひれ」とは「触れる」ことだと注釈して、

定家卿は此秋には人のうちふれて待れば男鹿は悲しみて山下
とよむほとそ啼覽と也。嫉妬の心也。

と、定家の説として、雌鹿のいる秋に人が触れるので、雌鹿が嫉
妬して泣くのだという解釈を挙げている。しかし『僻案抄』「注
四」では、

うらひれうらふれと云詞ものうれへたる心也。しなへうらふ
れなと云皆同心也。

と、「うらひれ」を「憂へる」ことだと解していて、『持為抄』
の引く定家説とは全く異なっているのである。

また、

鶯の笠にぬふといふ梅花折りてかざさむおいかくるやと

(巻一 春上 三六番 東三条左大臣)

の歌については、『頭註密助』「注五」を見ると、頭昭注が、

よめる心は鶯のこゝちよく枝に木つたひありくをはぬふと

云也。

と、「笠に纏ふ」とは、鶯が枝を木伝い歩く様子を表していると言っているのに対して、定家が、

枝にこつたふをぬふといふ義にも不及。唯花の姿を笠につけて鶯やかさにぬひてきぬらんと思よせたるにても侍なや。

と、頭昭の解釈に反対している。ところが『持為抄』では、

鶯のかさにぬふとは、うくひすの木つたふすかた笠にぬふにたり。故かくよめり。老かくるやとは定家卿流には、此花笠をかさ、んとは老やかくる、とよめる也。家隆はこのかさぬふ花をおりてかさ、んとは鶯やわれを、いてこむとよめる也。されはこの老かくるは老の字にはあらず、おつかくる心によ 秘伝。

と注釈している。つまり、『頭註密勅』に見える定家説は無視して、定家が否定する頭昭説を取り入れ、全く別の定家説を挙げているのである。

右の例を初めとして、『持為抄』の引く定家説や頭昭説のほとんどは、『辭案抄』や『頭註密勅』、『頭昭古今集註』、『袖中抄』などのいずれの注釈書にも見えないのである。逆に、『頭註密勅』や『辭案抄』が、定家説、頭昭説として引かれていること

はほとんどない。

おもへども人めづつみのたかければ河と見ながらえこそわたらぬ
（巻十三 恋三 六五九番 よみ人しらず）

の歌にしても、『頭註密勅』を見ると、頭昭が、

かはとみなからとは、あはと見なからといふ也。古歌みな此心なり。あはと云は、あれと云詞、あれはといふは、かれよと云詞なれば、かはといひ、あはといふ也。同事也。

と、「かは」イコール「あは」と解するのに対して、定家は、

あはを河とよめるとは知侍らず。

と、頭昭説に反対している。しかし、『持為抄』は、

人めをつ、むに川のつ、みをそへたり。

とするだけで、頭昭と定家の説が対立していることには全く触れていない。

このように、『持為抄』に見える頭昭説、定家説は、『頭註密勅』や『辭案抄』などと全く違っている。しかし、定家説や頭昭説を伝えようとしていながら、『頭註密勅』などにある説を勝手に変更するということは考えられない。これは、『持為抄』が、『頭註密勅』や『辭案抄』などを使わなかった、いや、使うこと

ができなかったためだと思つのである。つまり、『持為抄』は、『頸註密勘』や『僻案抄』などを伝授してもらえなかった人物が作ったのではないだろうか。そして本来の定家の説は伝えられないまま、独自の、言わば冷泉家だけに伝わった定家説として、冷泉持為の注釈を權威づけようとしてゐるのではないかと思われてゐるのである。

〱二二〱

『持為抄』が典拠不明の定家説を挙げてゐることを述べてきたが、さらに、『持為抄』が、『百人一首』の注釈を典拠とする二条家説を引用してゐることに、注目すべきであろう。

有あけのつれなく見えし別れより暁はかりうき物はなし

（巻十三 恋三 六二五番 壬生忠岑）

について見ると、『持為抄』は、やはり『頸註密勘』を引いてゐない。『頸註密勘』では、頸昭が、

これは女のもとより帰るに、われはあけぬとて出るに、ありあけの月はあるもしらす難面みえしなり。そのときより暁はうくおほゆとよめり。た、女に別しより暁はうき心也。

と、女に違つて帰る憂さを詠んだと解し、定家が、

つれなくみえし、此心にこそはべらめ。此詞つときはよはす。糸んにおかしくもよみて侍かな。これほとんどの歌一よみ出たらん、此世の思出に侍へし。

と、評してゐる。ところが『持為抄』の注釈は次のようになってゐる。

あり明のつれなく残りし明ほのに別しも、今の暁のわかれ程にうからぬと也。二条家説には此歌はあはすして帰る心をよめるとなん。在明はひさしく残る物なれはつれなくといひ侍れども、このつれなくみゆるは人の事也。心は人のもとに行て終夜心を盡していかてあはんと思に人はつれなくてはてぬれは、いか、はせんと立わかる、ころ在明の月のあはれもふかく詠て帰るさま也。たとひあふ夜のかへさなりとも、かゝるそらはかなしかるへきに、結局あはてわかる、を思ひ控て今夜のあかつきはかり世にうき事はあらしとそおもふよしなり。古今集にはいつれの歌がすくれたりと後鳥羽院定家家隆に御たつね有しに、いつれも此歌を申されけるとそいひつたへたる 秘伝。

このように『持為抄』は、顕昭や定家の説は挙げないで、会わな
いで帰る心だとする、二条家の説を挙げているのである。そして、
この二条家説は、『百人一首』の注釈巻の一つである『百人一首
満基抄』(以下『満基抄』と記す)の説なのである(注6)。
以下、六二二番歌についての『満基抄』の注釈を挙げて比べてみ
よう。

此歌はあはずして帰る道をよめり。在明はひさしく残る物な
れはつれなくといひ侍り。此つれなくみゆるは人の事也。心
は人のもとにゆきて終夜心をつくしていかてあはんと思ふに
人はつれなくてはてぬれば、いか、せんと立別ころ、有明の
月のあはれもふかきをなかめつ、帰るさまなり。たとひあふ
夜のかへさなりともかゝる空はかなしかるへきに、結局あは
てわかる、を思ひわひて今夜の暁はかり世にうきことはあら
しと思ふよし也。古今集にいつれの歌かすくれたると後鳥羽
院定家家隆にたつね給ひけるに、いつれも此歌を申されける
とそいひつたへ侍る。定家卿はこれ程の歌よみて此世の思出
にせはやとのたまひしとぞ。

このように、『持為抄』の引く二条家説は、『満基抄』の注釈に

内容も文章もほとんどそっくり一致している。

『古今集』の歌のうち、『百人一首』にも採られている歌は二
十四首ある。この中で、前述した六二二番以外に、三一五番、三
三二番、三六五番、四〇七番の注釈に、二条家説として『満基抄』
の説を引用しているのである。そしてこの五首の歌注のうち、三
六五番以外は「秘伝」となっている。

さらに、二首ばかり例を挙げておこう。

『持為抄』

(巻六 冬 三三二番)

やまとの園にまかれりける
時ゆきのふりけるをみてよ
める 坂上足則

『満基抄』

あさほらけ有明の月とみるま
てに古の、里にふれる白雪
坂上足則

朝ほらけ有明の月と見るまて
に吉野の里にふれる白雪
心は雪の夜明て後にきえか
ほに見ゆるは在明の月の影
也と云心也。又二条家説に
は此歌をば彼里の時の眺望

此歌は彼地の時の眺望と見

と見侍るへき也。里にふれる白雪とはうすき雪に侍るへし。有明の月といへるに叶へり。心をつけて見侍へき也とぞ 秘伝。

（巻六 冬 三一五番）

冬の歌とてよめる

宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草も枯ぬとおもへむねゆきか寛平の天氣あしかりし比、北山に籠居してよめる故に人めも草も枯たりとよめり。又ある家の説には、此歌は秋のさひしさをもつてよめる也。されは

侍るへきなり。里にふれしら雪とはうすき雪に侍へし。有明の月といへるに能かなへり。心をつけて見侍るへき也。

源宗于朝臣

山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

此歌は先秋のさひしさをよめる也。されは秋の暮など

秋の暮などには猶草木の色

にも逍遙の人めも侍るを、

冬になりては木葉もおち草

もかれ行ころ、いと、人め

たにたえたるさまを思ふへ

しとぞ。又ある説には、春

秋ともにさひしき心を思ひ

つ、けて此歌を見侍るへし

とぞ 秘伝。

これらの説の挙げ方は、持為が、自説だけでは不十分なので、参考として、二条家説を引用したように思われるが、とにかくこのように、『持為抄』は、『二条家説』又は「ある家の説」として、『瀟墓抄』の説を引用しているのである。

元来『百人一首』は二条家に伝えられたものである。従つてその注釈も、当然二条家が中心であると考えられるが、『瀟墓抄』も序の部分に、

此百首は二条の家の骨目也。以此歌俊成定家の心をもさくりしるへきとぞ説侍し。

とあって、『百人一首』を二条家のものとする、二条家流の注釈であると考えられる。又、類書のいくつかは宗祇の奥書を有しており、頓阿の系統に属する連歌師の作と考えるのが通説のようである（注7）。『持為抄』は、二条家といってもそのような二条家末流の『百人一首』の注釈を、「二条家説」として引用しているのである。

以上、『持為抄』が『顕註密勘』や『僻案抄』などを用いず、二条家の『百人一首』の注釈書である『満基抄』の説を引用していることを述べてきた。『持為抄』を冷泉持為の注釈とすることには疑いが持たれていることは最初に述べたが、その疑いが、さらに濃厚になったのではないだろうか。もちろん持為のものではないとは言いつてもいいが、『顕註密勘』などを伝えられず、『満基抄』などの説を二条家説として挙げる人物は、冷泉家と称してはいても、持為などよりもっと末流の者ではないか。たとえば、下冷泉の末流に属する、あるいは持為に関わりのあった連歌師などが、冷泉持為に託して作ったのではないかとも思われる。

以上、『百人一首満基抄』の引用という事実の指摘を中心にしながら、『古今集冷泉持為抄』についての疑問を呈示した次第で

ある。御教示を待ちたい。

《注1》使用した本は、宮内庁書陵部蔵五冊本で、外題『古今和歌集冷泉持為御述』、内題『古今和歌集冷泉持高(カマ)御抄』となっている。片桐洋一先生著『中世古今集注釈書解題二』によれば、この他宮内庁書陵部にもう一本あり、彰考館文庫、広島大学にも蔵せられている。

《注2》『中世歌壇史の研究・南北朝篇』

《注3》『統々群書類従』第十五

《注4》『三代集の研究』所収の瓜生安代氏による翻刻を使用した。

《注5》元禄十五年刊八冊本を使用した。

《注6》本文は笠間影印叢刊（笠間書院刊）による。（書陵部蔵一応永十三年藤原満基一の奥書を持つ。）

《注7》井上宗雄著『中世歌壇史の研究・南北朝篇』

樋口芳麻呂、久曾神昇編・笠間影印叢刊『百人一首抄・解説』など。

尚『百人一首満基抄』は有古保氏によって初めて紹介された。（昭和二十六年『日大語文』第一号『百人

一首宗祇抄について―その著者を論じ百人一首の撰者に及ぶ―」

〈付記〉

『古今集』歌番号と本文は「新編国歌大観」を使用した。

また、諸注釈書の引用に際しては、漢字を通用のものに改め、私に句読点を加えた。